

## 「子供を真ん中にした給食」という 新たな潮流

評者 島村菜津（ノンフィクション作家）

昨年の秋、都内の大ホールで開かれた「オーガニック給食フォーラム」は、会場に10000人が集い、オンラインで40000人が参加する盛況ぶりだった。その熱気に、子供たちの食を豊かにという大人たちの切なる思いを感じた。

また、これを陰で支えたのは「オーガニック給食マップ」（野々山理恵子事務局長）という有機給食のポータルサイトを立ち上げた女性を軸とするボランティア150人である。

本書にもあるように、まさに「人を動かすのは、経済的理由とは限らない。何かの思いから、人は動く」。全国大会の熱気も冷めやらぬ今、世に出た本書は、学校給食を有機に変えるための具体的なノウハウ本に留まらない。

たとえば、大事な視点は、有機

化の対象を、学校や保育所に限らず、福祉施設や病院、役場や刑務所の食まで見据えていること。また、否定的に語られることが多いセンター方式でも、千葉県いすみ市や大分県臼杵市では有機化を実現できたこと。規模にもよるが、有機化の先進国イタリアでは7割以上がセンター方式である。

日本最大の課題は、有機農産物が足りないこと。各地のJAが、有機農業を生き残り策の一つにしっかり位置づけることが鍵だが、本書にも、近郊のJAの協力の下、2027年までに有機米100%、有機野菜100%という高い目標を掲げる熊本県山都町が紹介されている。そして有機農業への転向を積極的に支援する「コープ自然派」の活動も興味深い。

さらに生産過程で多くのCO<sub>2</sub>



### 『有機給食スタートブック』

齋理恵子・谷口吉光 編著

農文協 1980 円（税込）

を排出する肉や魚を減らし、卵、乳製品、豆、全粒穀物、野菜からタンパク質をとるメニューや旬の野菜にこだわるフランスやミートレスマンデーを取り入れたアメリカの話はすぐにでも始められそうだ。各地の多様な試みに、子供を真ん中にして給食を考えることで、都市や農村、生産者と消費者、左や右といった対立から共闘へ向かう新たな潮流を感じた。有機給食への挑戦は政治を自分たちでつくるという民主主義の深化でもある。